

世界の中の日本語

文学研究科 町田 健

1. はじめに

全世界で使われている言語の数は、7千にも上ると言われている。日本語もその中の1つである。日本語の使用者数は約1億2千万であり、中国語や英語には及ばないものの、世界でも上位十番目くらいには位置する大言語であることに間違いはない。しかし、日本語が使用されているのは、ほぼ日本という狭い地域に限られているため、日本語を母語とする日本人たちは、自分たちの言語が特殊であり、外国語を話す人々が学習するのは困難だと考える傾向にある。事実はこちらとは逆なのであり、日本語が示す言語的特徴は、世界の言語の中では、どちらかと言えば多数派に属するものであるし、個々の特徴を考えると、比較的単純で規則的な性質をもつ場合が多い。この講義では、日本語がもつこのような特徴を、世界の諸言語がもつ特徴と対比しながら解説していく。

2. 日本語の起源

人間は言語を使用する動物として定義されるから、言語の起源は人類の起源と同時である。人類の起源に関しては、それをアフリカに求めることができるという説が有力であるので、これに従うならば、言語の起源もアフリカだということになる。ただし、人類誕生と同時に言語が発生したのではなく、人類がアフリカから各地に移動した後で、いくつかの場所で言語が生まれたと主張する学説（多地域進化説）もある。

いずれの場合であれ、言語が誕生したのは十万年ほど前のことであり、誕生時の言語がどのような姿をしていたのかを知る方法はない。言語学の一分野である「比較言語学」では、複数の言語について、基礎語彙の中から、意味と語形の両方が類似している一群の単語を抽出し、これらに関して、語形を構成する音の間に規則的な対応が見出される場合、比較された諸言語の起源が同一であるものと推定している。この方法に基づいて同一起源が推定される諸言語のことを「語族」と呼ぶ。

語族としては、次のようなものがある。

- ・インド・ヨーロッパ語族：英語、フランス語、ロシア語、サンスクリット語、ギリシア語、ラテン語
- ・アフロ・アジア語族：アラビア語、エジプト語、チャド諸語、アラビア語、エチオピア語
- ・フィン・ウゴル語族：フィンランド語、ハンガリー語、エストニア語、ラップ語
- ・チュルク語族：トルコ語、アゼルバイジャン語、タタール語、チュバシ語
- ・モンゴル語族：モンゴル語（ハルハ語）、チャハル語、オルドス語、ブリヤート語
- ・ツングース語族：満州語、ソロン語、エベンキ語、ウデヘ語、オロチ語
- ・シナ・チベット語族：中国語、タイ語、ラオス語、チベット語、ビルマ語
- ・オーストロ・アジア語族：ベトナム語、カンボジア語(クメール語)、モン語
- ・オーストロネシア語族：マレー語、インドネシア語、タガログ語、台湾先住民諸語、フィジー語、サモア語、トラック語、ハワイ語、マオリ語、タヒチ語
- ・ドラビダ語族：タミル語、マラヤーラム語、カンナダ語、テルグ語
- ・ニジェール・コルドファン語族：メンデ語、フラ語、ウォロフ語、ドゴン語、ヨル

バ語、

- ・ ナイル・サハラ語族：ソンガイ語、マバ語(チャド)、フル語（スーダン）、クナマ語（エチオピア）
- ・ コイサン語族：ブッシュマン諸語、ホッテントット諸語(アフリカ南部)
- ・ エスキモー・アレウト語族：エスキモー語、アレウト語
- ・ ナデネ大語族：トリンギット語、ナバホ語、アパッチ語、ヒカリヤ語

現時点では、日本語と同一起源の言語は発見されていない。比較言語学が適用してきた方法以外で、同一起源を証明する新たな方法が開発されれば、同一起源の言語が発見される可能性が全くないわけではない。しかし、その方法に関する見通しはないので、日本語の起源が解明されることはほぼ期待できない。

ただし、音韻の面では、日本語とオーストロネシア諸語には類似点があるし、文法に関しては、朝鮮・韓国語、モンゴル語などの北方系の諸言語との類似点が、日本語には多い。従って、日本語の起源を南方もしくは北方の諸言語に求める学説、さらには、両方の系統の言語が混合した結果日本語が成立したという説も提唱されている。しかし、いずれの学説も、確実な証拠や方法に基づいているわけではなく、定説とはなっていない。

3. 日本語の特徴

3. 1. 全体的特徴

世界の言語は、文法的な機能を表す方法によって、3つの類型（タイプ）に分類される。類型を区別する最も明確な基準は、主語と目的語、事柄の成立時点（現在・過去・未来）を表すために、どのような方法が選択されているかということである。

a. 孤立語

主語と目的語を語順によって表現する。
事柄の成立時点を表すための特別の単語がない。
中国語、タイ語、ベトナム語など。

b. 膠着語

主語と目的語を表すために、名詞の後ろに置く特別の単語がある。
事柄の成立時点を表すための特別の単語がある。
日本語、朝鮮・韓国語、モンゴル語、チベット語など。

c. 屈折語

主語と目的語は、名詞が活用（語形変化）することによって表される。
事柄の成立時点は、動詞の活用によって表す。
ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、ロシア語など。

主語と目的語は、文の中で最も重要な要素であり、事柄がどの時点で起こったのかも、事柄の性質を構成する最も重要な要素の一つである。従って、これらの要素を表す方法によって言語の類型を設定することには合理性がある。

日本語は典型的な膠着語である。膠着語は、上であげた主語や目的語、事柄の成立時点以外にも、使役や受け身、事柄の成立可能性などの文法的な機能を、それぞれ特別の単語によって表す言語であるため、特に動詞の後ろにこれらの文法的機能を表す単語が次々と後続することができる。多くの単語が並ぶ状態を、物が膠で接合される様子を喩えて「膠着」と呼んでいる。

屈折語が示す複雑な語形変化は、記憶の負担になることは疑いない。孤立語には、

語形変化がないが、文法的な機能を表す特別の単語がない場合が多いことから、このような機能を正しく理解するためには、状況や知識を活用する必要があり、表現面では単純であっても、理解の過程は比較的複雑になる。

膠着語の場合は、文法的機能と単語が原則として一対一に対応しているため、文法的機能を表示するための単語の選択が容易であるし、機能が単語によって明示されているため、理解の過程も単純である。従って、事柄の全体的枠組みを決定する文法的機能に関しては、膠着語が最も高い効率性を示していると言える。

恐らくはこのような理由で、世界の言語のうち最も多くの言語が属するのが膠着語であり、この類型に属する日本語は、従って、世界の言語の中でも多数派に属する特徴をもっていることが分かる。

3. 2. 個別的特徴

日本語が示す個別的特徴は、全体としては非常に簡潔で規則性が高いものが多い。つまり、日本語はできるだけ単純な仕組みを用いて、他の言語が表すのと同じ内容を表すような方法を選択している、表現上の効率性が高い言語だと言える。

a. 音韻

日本語の母音は/a/、/e/、/i/、/o/、/u/の5個であり、これらは最も基本的な母音である。日本語よりも少ない個数の母音のみを使用する言語もあるが、英語の22個、フランス語の12個などに比べるとはるかに少なく、母音の仕組みは単純だと言える。

子音についても、唇を使う/p/と/b/、歯を使う/t/と/d/、軟口蓋を使う/k/と/g/という、最も基本的な子音に、/s/と/z/、/m/、/n/、/r/、/h/、それに「撥音」（「ん」の音）/N/が加わった13個のみであり、子音の個数もかなり少ない。

従って、全体として日本語の発音は、世界の諸言語の中でも最も簡素な機構を示すものの一つだと見なしてよい。

ただ、単語ごとの高低の音調である「アクセント」に関しては、単語に与えられたアクセントの型が、いかなる規則に従って決定されているのかが全く不明である。従って、単語がもつアクセントの型は一々記憶する以外に習得する方法がない。

b. 品詞ごとの語形

1つの言語は数万個から十数万個程度の単語をもつが、それぞれの単語は文中での機能に応じて「品詞」に分類される。語形変化を行わない中国語や、語形変化が簡素化されている英語のような言語では、単語の語形によってそれが属する品詞を特定することはできない。

これに対して日本語は、動詞は「見る」「食べる」のように、終止形が「る」で終わるか、「行く」「話す」のように終止形が「ウ段」で終わるといった特徴をもつ。形容詞であれば、「大きい」「美しい」のように、終止形が「い」で終わる。副詞は、動詞や形容詞ほど明確な語形的特徴を示すわけではないが、「はっきり」「すっかり」「どっぷり」のように「り」で終わる擬態語が副詞として機能する場合は多いし、「早く」「広く」「静かに」「豪快に」のように、形容詞や形容動詞の連用形が副詞的に働いている場合には、「く」または「に」で終わっている。名詞については、語形上の特徴はないが、主要な品詞が動詞、形容詞、副詞なのだから、これらについて一定の語形を示す傾向があるのであれば、それ以外の語形をもつ主要な単語が名詞だと考えればよい。

今あげた以外の品詞としては、助詞と助動詞があるが、これらは文法的な機能を示すものであり、その数も極めて限定されている。従って、数の上で圧倒的に多い主要

な品詞とその語形に一定の対応関係があるのであれば、単語が属する品詞の同定が容易になり、文の意味を理解する過程が、それに応じて円滑になる。

c. 動詞の活用

日本語の動詞は、後にどんな単語が続くかによって語形が変化する、つまり活用する。この活用の種類として、「五段活用」と「一段活用」がある。五段活用の動詞「取る」は、「取ら（ない）」「取り（ます）」「取る」「取る（とき）」「取れ（ば）」「取れ」のように活用する。一段活用の動詞「見る」は「見（ない）」「見（ます）」「見る」「見る（とき）」「見れ（ば）」「見ろ」のように活用する。

それぞれの種類の活用について、個々の活用形は規則的に決まる。従って、どの動詞がどの種類の活用をするのかさえ知っておけば、活用形を正しく決定することができる。例えば、「着る」と「切る」は、終止形は同一だが、前者は一段活用、後者は五段活用に属する。この知識があれば、それぞれの動詞の後に丁寧の助動詞「ます」が後続する場合、前者なら「着ます」となり、後者なら「切ります」となることは、活用形を作る規則によって正しく予測することが可能である。

一定の規則に従わない活用形を示す動詞は、日本語には「来る」と「する」の2つしかない。つまり、日本語には不規則動詞が2つしかなく、それ以外のすべての動詞は規則動詞だということであり、日本語の動詞の語形変化は極めて規則的だと言える。

d. 語順

どんな言語にも、文を作るために使われる単語を配列する規則、つまり語順がある。日本語の場合、「名詞＋助詞」「形容詞＋名詞」「動詞＋助動詞」などの語順の規則がある。また、主語が文頭に置かれ、述語が文末に置かれるという順番も、例外はあるが、かなりの程度の規則性を示している。

日本語は、疑問文を作るための終助詞「か」があるため、平叙文の末尾に「か」を置けば疑問文となり、英語のように主語と動詞または助動詞を倒置するような方法を採る必要がない。つまり、それだけ語順の規則が簡単ですむということである。

また、「何」「誰」「どこ」「いつ」のような「疑問詞」と呼ばれる単語は、英語をはじめとするヨーロッパ諸語では、文頭に置かれる規則になっている。これらの疑問詞が主語であれば、文頭に置かれることは通常の語順の規則と同じであるが、主語以外の場合は、疑問詞でなければ文頭には来ないのだから、疑問詞を含む文のために、特別の語順の規則を設定しておく必要がある。一方で日本語は、疑問詞が文頭に置かれるという規則はなく、疑問詞の機能に応じて、通常の語順の規則に従った位置に配置される。従って、疑問詞を含む疑問文に関しても、日本語が示す語順の規則は単純であると言える。

e. 時制

事柄が成立する時点は、現在、過去、未来のいずれかであり、この時点に応じて動詞の語形が変化したり、特別の助動詞を用いる場合、その仕組みを「時制」と呼ぶ。従って、現在、過去、未来という3つの時制が基本であり、英語、フランス語、イタリア語などは、この3時制を備えている。しかし日本語には、助動詞「た」を用いる過去時制はあるが、現在時制と未来時制の区別はない。現在と未来を動詞形で区別することができないのは不都合にも思えるが、実はそうではない。

なぜならば、「太郎は家にいる」が現在を表すものと理解され、「太郎は家に来る」が未来を表すものと理解されることから分かるように、未来形がなくても、現在と未来を区別することは容易だからである。文中の動詞が「いる」のような状態を

表す動詞の場合には、この形で現在を表し、動詞が「来る」のような動作を表す動詞であれば、この形で未来を表す。このように、動詞の表す意味を知っていれば、現在と未来を区別することができるのが原則であり、わざわざ特別の未来形をもつ必要は必ずしもない。日本語をはじめとして、朝鮮・韓国語、ロシア語、ドイツ語など、多くの言語が未来時制をもたないか、あっても使用頻度が低いのは、この理由による。

f. 冠詞

名詞が表す事物が、同じ種類の他の事物と区別されなければならないのかどうかを表すための単語が「冠詞」である。例えば、「車はもう洗った」という文の「車」は、他の車とは区別されなければならない。他の車であれば、洗っていないことも十分にありうる。従って、英語ではthe carのように「定冠詞」のtheをcarの前に置く。一方、「私は車をもっている」という文の「車」は、他の車と区別される必要はない。どんな車であっても、車が私に所有されていればそれで問題はないからである。従って英語では、「不定冠詞」のaをcarの前に置いてa carのように表現する。

しかし、冠詞がなくても、今の説明によって明らかなように、事物が他の事物と区別されるべきかどうかは、文全体の意味や状況を考慮すれば、それほど困難なく理解されることができる。このことから、日本語はわざわざ冠詞を用いていないのだろうと考えることができる。中国語やロシア語をはじめとして、冠詞のない言語は多い。

g. 関係代名詞

「私の会社に来た男」や「私が招待した女」という表現では、「私の会社に来た」「私が招待した」という文に近い語句が、「男」や「女」という名詞が表す事物の性質を表している。事物の性質を表す単語は「形容詞」だが、形容詞と同じ働きをする文に近い語句を「関係節」「形容詞節」「連体修飾節」などと呼ぶ。

「私の会社に来た」という語句には主語がないし、「私が招待した」には目的語がない。これらに対応する英語の表現は、who came to my officeとwhom I invitedであり、whoとwhomが主語と目的語の働きをしており、関係節が修飾する名詞と同じ事物を表している。このように、関係節中で、それが修飾する名詞と同じ事物を表すために用いられる単語のことを「関係代名詞」と呼ぶのだが、日本語には関係代名詞がない。

名詞の前に、主語や目的語のない、文に近い語句が置かれていれば、それは関係節だということが理解できる。恐らくこのような理由により、日本語は関係代名詞を用いないという選択をしているものと考えられる。